

八路軍が教えてくれた終戦

長崎県 松尾重義

長崎県雲仙岳の麓、温泉の街小浜町の農家に、大正十三（一九二四）年十二月十四日に生まれました。小浜尋常高等小学校を卒業し、農家を手伝いながら小浜青年学校研究科を卒業しました。

小学校に入学したところ、昭和六（一九三一）年九月十八日、満州事変が勃発し上海事変に飛火しました。やっと満州事変が終わったと思ったころ、今度は昭和十二年七月七日に支那事変が勃発し戦火は支那全土に広がり、毎日のように赤紙召集令状により、若い人や壮年の人々が出征して行きました。そして働き手を失った家族の苦勞している姿を見るようになりました。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発し、世は正に軍国調一色になりました。ラジオからは連戦連勝のニュースばかりが流

れ、血湧き肉躍る毎日を送りました。小学生のころから満州事変、支那事変、太平洋戦争と戦争の中で成長して来ましたので、早く国のために役に立ちたいと思い、徴兵検査が待ち遠しく思いました。家からも長男が出征して行きました。

昭和十九年八月、皆と共に徴兵検査を受けたが、残念ながら乙種合格でした。甲種合格であればすぐに入隊出来るのと思いました。乙種でもいづれ赤紙召集は来ると心に決めておりました。

昭和十九年八月と十月に長崎はB29の空襲を受け、日本国内の各地にも敵機が飛来するようになり、南方戦域からも日本軍の苦戦している戦況が伝わってくるようになりました。

昭和十九年十一月十五日、西部第四十七部隊に入隊すべしとの通知を受けた時は「やっと来たか」と喜びました。青年学校で軍人勅諭や軍事教練を受けていたので、いつ入隊してもいい覚悟は出ていました。当時、家族は祖父母を加えて七人で、長男に続いて私も入隊しますと、男二人

の働き手が減ることになりますが、両親はじめ皆、時局柄喜んで送ってくれました。十一月十五日、家族、親戚、町内の皆様や国防婦人会の方々の盛大な見送りを受け、当日出征します四人を代表して私が御礼の挨拶をしました。

大村部隊に着きますと、三百人ぐらいの初年兵が入隊し、支給されたのは軍服と地下足袋と帯剣でしたが、帯剣も鞘は鉄でなく竹製で、物資不足を物語っているようでした。入隊三日目の十八日夜十二時ごろ、突然非常呼集がかかり、武装して営庭に整列しますと、行軍を命ぜられ、着いた所は大村駅で直ちに乗車を命ぜられました。

列車内は通路だけが明るく、窓は外から見えないようにしてありました。朝早く博多港らしい駅で下車し、今度は停泊している輸送船に乗船させられました。その時の顔見知りの先輩から「お前たちは北支に派遣されたぞ」と聞かされ、はじめて行先が「北支か」と分かりました。

船は玄界灘を北に向け進み、夕方釜山港に到着、

直ちに軍用列車に乗車しました。その時、乾パンを三袋渡され、乗車した初年兵は三百人ぐらいと、輸送指揮官の中尉一人でした。列車は朝鮮半島を縦断し新義州、安東から満州国へ入り、奉天（瀋陽）、錦州、山海関を経て北支那に入りました。途中で腹が減って乾パンを食べて叱られる一幕もありました。かくして一週間がかりで山西省の論次という所に到着しました。

さすがに北支は寒い、列車から下車しますと冷たい風が膚を刺します。論次の駐屯地で連隊長から「長旅ご苦労であった。北支の戦況は厳しく一刻も油断は許されない。みんなで力を合せ勝ち抜かねばならない。寒い地区だけに健康に注意して頑張って頂きたい」との訓示がありました。

ここで防寒服等を支給された私たちは、論次から北十キロ地点に位置する東洋鎮に駐屯する第二中隊（中山隊）に派遣となりました。第二中隊は四個班に分かれていて、各班の人員は三十人ぐらい、私は第一班の擲弾筒班に配属されました。兵

舎は支那の民家を利用して、一号舎には古兵たち、二号舎には初年兵ばかりの分宿になりました。山から黄土を交えた吹き降ろす風の冷たさ、空っ風の中での軍事教練、いづどこから八路军が出て来るかわからない中での訓練ですから、教える人も教えられる者も真剣そのものでした。

私は青年学校で軍事教練などの教育を受けていましたので少しは楽でしたが、防毒マスクをかぶり走らせられるときは苦しくて苦勞しました。そして毎日叩かれ、叱られての生活には、軍隊の厳しさを身にしみて感じました。

ある時「前へ進め！」の号令で行進中、クリークが前にあり、「止まれ！」の号令がないまま胸まで届くクリークの中をざぶざぶと行進して岸にはい上がった時の寒さ。命令とあれば火の中水の中の言葉通り、零下一五度ぐらいの厳寒の中での訓練は、まことに厳しいものでした。ぶるぶる震えながら、急ぎ兵舎で着替えしたこともありました。

八路军の神出鬼没の行動は日本軍を悩ました。私たち初年兵も一期の検閲中、三回八路军の討伐に出動しました。外で干した洗濯物は凍りつくので、室内は洗濯物の干し場になりました。そのような厳寒の中で三カ月間の教育を受け一期の検閲を終了しました。

中隊で二人下士官候補者として選拔され、山東省の克州にある下士官候補者学校に入学しました。この学校には一個班二十人で六個班ありました。所属部隊は至鋭第一五七二三部隊第五十五大隊片桐隊に編入されました。総員三百人ぐらいでした。私は第一班となり、鴨川班長は長崎県佐々町出身の立派な班長さんで大変お世話になりました。

下士官教育を受けながら、天津から通ずる「津浦線」の鉄道警備にも勤務しました。八路军が出没し鉄道を破壊している、一部では鉄道のレール、枕木を持ち去るとの連絡も次々と入り、下士官教育を受けるところではなく、鉄道警備も緊張の連

続でした。戦闘の相手は中国正規軍でなく共産八路軍で至る所地雷を敷設しているのです。

外部からの情報が全く入らないまま昭和二十年十月を迎えました。依然として八路軍の攻撃は厳しく、私も初年兵ながら精勤章を三本も頂き、また衛兵司令役もやらされました。

十月二十日ごろ、曲府方面の八路軍討伐に二十人ぐらいで出発しました。平坦な道路で突如三百人ぐらいの八路軍と遭遇し撃ち合いとなりました。私たちも一生懸命抗戦しましたが多勢に無勢、古兵三人が次々に倒れ、初年兵の戦友たちも三人が負傷する。古兵が「逃げる！ 逃げる」と叫ぶ。敵弾がびゅんびゅんと耳をかすめる。「畜生畜生！」といいながらも敵は多勢、どうすることも出来ない。負傷兵に「トラックに乗れ」と叫び、乗せて発車するが、銃弾に倒れた古兵三人をどうすることも出来ず、逃げる以外に方法がない。銃弾を聞きながらようやく脱出することができたのです。

初めて体験した八路軍との激戦、三人の古兵の死体を残して来たことが悔やまれるがどうしようもない。ぐずぐずしておれば犠牲者が多くなるばかりで、やっと中隊に逃げ帰ることが出来ました。かねて死は覚悟しておりますが、現実には短時間に三人の古兵の戦死、戦友三人の負傷を見て、戦争の悲惨さを身にしみて感じました。このように戦争が続く限り、明日は我が身かと覚悟せざるを得ませんでした。

十月二十二日、本隊へ現状を報告するため沼田伍長が派遣され出発しました。数時間後、沼田伍長が白旗を持って我が方へ向かって来るので、おかしいなあと思って事情を聞きますと、本隊へ行く途中、八路軍に捕らえられた。その時八路軍の将校から「戦争は終わっている」ことを聞かされびっくりした、といいます。

そのことを知らせるため白旗を持って来たという沼田伍長の言葉に私たちもびっくりして「それは本当か」と尋ね直すくらい、みんな信用しよう

とはしませんでした。それが事実なら戦闘行為を止めようということになりました、時はもう昭和二十年十月二十二日のことでした。

八路軍が教えてくれた終戦。なぜ本部は我々に教えてくれなかったのか残念に思いました。早くから終戦が分かっていたのであれば、先日の八路軍討伐にも出発しないし、三人の古兵も死なずにすんだのにと残念でなりませんでした。私たちも抵抗を止めて八路軍の捕虜となり武装解除をさせられました。そのとき私たちの班は僅かに七人でした。

私たちの捕虜生活が始まりました。八路軍の中に日本の陸軍士官学校出身の将校がいて、日本のこともいろいろと教えてくれました。その将校の名は「シさん」と呼んでいましたが、その「シさん」が「みんなの生命は保証します。みんなが帰国出来るようこれも保証します」と明言しました。八路軍側から鉛筆とノートが渡されました。共産主義教育のために使用するよう渡された二品でした。どこから連れて来たのかまとまった人数のよ

うでした。

私たちに与えられた住居は支那人の民家で一軒に約二十人収容されましたが、生活は全く自由で、使役等に使われることもありませんでした。食事も自由にもらいに行き、好きな時間に食べました。毎日十時から行われた共産主義教育も強制的でなく自由でした。一週間ぐらいして講義室をのぞきますと受講者は百人ぐらいでした。講義の内容は天皇制打倒や共産主義の必要性、共産主義社会の確立等で赤旗の歌を指導し合唱させたり教育でした。一般支那人と接触する機会もありましたが、その言動も友好的で、この度の戦争もお前たちが悪いのではない、偉い人たちが悪い、お前たちは友達だといって、とても友好的でした。

来る日も来る日も共産主義教育と赤旗の歌の合唱の繰り返しで、後はごろごろして日を過ごすことばかりでした。「こんな生活を送っているが、日本はどんなになっているのかなあ」と考えない日はありませんでした。食糧も立派な物ではない

が不自由なく食べさせてくれるので助かりました。

昭和二十一年の春になって帰国の話が出てみんなが喜び合い、希望に胸をはずませ生活も明るくなりました。四月の末、山東省の山の中より列車に乗って二時間、青島の煉瓦工場に集結しました。ここで初めて米軍のジープを見て驚きました。こんな自動車もあるのかと世の移り変わりを知らされた思いでした。乗船する船はアメリカ軍のリバティで最後の復員船と聞きました。五月二日、約五百人の兵隊を乗せ青島港を出港しました。

昭和十九年十一月から一年半、北支の寒い地での軍事教練、下士官候補者の教育も十分に受けないうちに鉄道整備や八路軍の討伐に狩り出され、挙げ句の果てには三人の古兵が戦死する戦い、しかも終戦後の十月まで終戦を知らず、ついに八路軍の捕虜となり毎日毎日共産主義の教育を体験したことなどを思いながら離れゆく青島の港に別れを告げました。

船が沖に出るにつれ高波に船は揺れ、とくに台

風の関係もあって船酔いで食事もできない人も多くなりました。幸い私は船酔いすることもなく、戦友の分までご馳走になりました。復員船は三日がかりで佐世保港の針尾に、五月五日に到着し、ここで消毒を受け、なつかしい日本本土の大地に上陸しました。

私たち第二中隊は片桐隊長が新潟出身で、隊員も東北出身の人たちが多く、針尾に上陸後は時間を置かず解散となりました。そして急ぎ諫早経由で小浜に帰りました。

もちろん、両親は私の元気な姿を見て涙を流し喜んでくれました。仏壇に向い手を合せ、無事に帰れたお礼を申し上げ、八路軍討伐の時の光景と三人の古兵の遺体を残したことを思い、人が人を殺す戦争はしてはならないと誓いました。八月十五日の終戦という大事件を八路軍から聞かねばならないほど、通信系統が乱れていたのかと思い残念でした。